

## コリント人への手紙第一6章 「自由な社会とキリスト者」

### 1A 訴訟する教会の人たち 1-11

1B 裁判官への訴え 1-4

2B 互いの訴え 5-8

3B 正しくない者たち 9-11

### 2A 主のためにある体 12-20

1B 欲を満たす自由 12-14

2B 遊女との交わり 15-17

3B 自分の体に対する罪 18-20

## 本文

コリント人への第一の手紙 6 章を開いてください。私たちは、前回、コリントの教会の中で近親相姦の罪を犯している男がいるのに、彼をそのまま受け入れている教会の問題をパウロが取り上げているのを見ました。教会が、罪に対してどのように対処すべきなのかをじっくり学びました。パウロが 5 章の最後でこう言っています。「5:12-13 外部の人たちをさばくことは、私がすべきことでしょうか。あなたがたがさばくべき者は、内部の人たちではありませんか。13 外部の人たちは神がおさばきになります。「あなたがたの中からその悪い者を除き去りなさい。」

### 1A 訴訟する教会の人たち 1-11

パウロは、続けてコリントの教会の中にある性的不品行、淫らな行いの問題について取り扱うのですが、その前に、内部で裁かなければいけないことに関して、さらに別の問題があることを取り上げています。12 節以降で、淫らな行いについて取り扱うのですが、その前に 1 節から 11 節で、彼らが教会の中で起こった些細な問題を、あまりにも安直に外の裁判所で訴えているという問題を取り上げています。

私たちにとって、裁判所はどれほど身近な存在でしょうか？私は、ほとんどお世話になったことがありませんが、アメリカで生活していた時に、本当に些細なことで訴訟している、悪い文化があることに気づきました。友人のアメリカ人たちも呆れた顔で、いろいろ話してくれました。例えば、当時有名だったのが、マクドナルドのコーヒーです。日本もそうだったのでしょうか、コーヒーがぬるくて不味くなっていました。理由はこういうことです。マクドナルドのドライブスルーで受け取ったコーヒーを、駐車場に停めて、膝の間に挟みました。そのコーヒーがこぼれて、大やけどを負ってしまったのです。こんなの本人が悪いですよ、けれども、マクドナルド社を、コーヒーが熱すぎるということで、裁判で訴えたのです。なんと、それでマクドナルド社に多くの過失があると裁判が判断し

たのです。<sup>1</sup>

こういった悪しき訴訟文化がアメリカにはありますが、ローマ社会にも訴訟は日常茶飯事でした。コリントの人たちは、近親相姦を犯している男をそのまま教会に受け入れていることが、自分たちは寛容だと誇っていたのに、明らかに矛盾していますが、教会の人々の間で起こっていた不正について、世俗のローマの裁判所で訴えていたのです。ユダヤ人の間にも、福音に敵対するゆえに同じような問題を犯したのを思い出しますね。イエス様をローマ総督に訴えました。ピラトは、ユダヤ教の中の教義的な議論であることをすぐに察して、無罪であることがすぐにわかりました。使徒パウロも、何度となく訴えられました。コリントでもそうでしたが、地方総督ガリオは、こんな訴訟の裁判官になりたくない、として、彼らをあしらいました。(使徒 18:12-17)

聞くところによると、今の教会においても、そのようなことがしばしば起こっているようです。アメリカの教会でも聞きましたし、韓国の教会においてもしばしば聞きます。そして日本の教会においてもですが、牧師や指導層が深刻な犯罪を働いているということ、「教会のカルト化」という言葉が使われるようになりましたが、そうしたことで訴える事件があります。これはもちろん、当局に訴えるべきことです。しかし、教会内部で起こったいざこざまでを、同じように訴えることも起こっているようです。検察は、不起訴処分にしたたり、裁判に持ち込まれても、被告の牧師は無罪だったりしますが、日本の場合は、判官びいき、つまり、弱者であれば何をやっても許されるという悪しき文化がありますね。ですから日本も、ここのコリントの教会の問題と無縁ではありません。

もちろん、殺傷事件であるとか、深刻な詐欺事件であるとか、刑事に関わることであれば、私たちはローマ 13 章で学んだように、教会の者たちはしっかりと、警察に通報しなければいけません。彼らは神のしもべであると、書いてありましたね。脱税という問題を犯していても、しっかりと国税局に対処してもらうことをしないとイケないでしょう。けれども、今、言ったように、教会で起こっている些細な問題を、わざわざ訴訟に持っていくのは、深刻な、霊的な問題です。

## 1B 裁判官への訴え 1-4

<sup>1</sup>あなたがたのうちには、仲間と争いを起こしたら、それを聖徒たちに訴えずに、あえて、正しくない人たちに訴える人がいるのですか。

パウロは、ここでキリスト者たちを「聖徒」と呼び、不信者の裁判官たちを「正しくない人たち」と言い表して対比しています。その裁判官が道徳的に腐敗しているということではなく、神の前に信仰によって義と認められていない人たち、という意味です。けれども、聖徒がなぜ、正しくない人たちに裁判を仰ぐのか？という、矛盾を指摘しています。

---

<sup>1</sup><https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%9E%E3%82%AF%E3%83%89%E3%83%8A%E3%83%AB%E3%83%89%E3%83%BB%E3%82%B3%E3%83%BC%E3%83%92%E3%83%BC%E4%BA%8B%E4%BB%B6>

<sup>2</sup> 聖徒たちが世界をさばくようになることを、あなたがたは知らないのですか。世界があなたがたによってさばかれるのに、あなたがたには、ごく小さな事件さえもさばく力がないのですか。

これからパウロは、しっかりと福音の真理に照らして、彼らのしていることがいかに的外れかを明らかにしていきます。福音によって神に救われるということは、神の国を受け継ぐということです。私たちは、ローマ 8 章で学びました。救われるとは、人が初めに神が造られたように、神のかたちに戻ることです。それは、神が世界を支配しているように、その被造物を人に任せて支配させるようにすることです。それを、キリストにあって罪の中に陥った私たちを回復し、神の子として、キリストと同じかたちにして、その栄光の姿をもって、世界をキリストと共に続べ治めるようにされています。「ロマ 8:17 子どもであるなら、相続人もあります。私たちはキリストと、栄光をともに受けるために苦難をともにしているのですから、神の相続人であり、キリストとともに共同相続人なのです。」パウロが、「聖徒」という言葉を使っているのは、ダニエル書 7 章で、「いと高き方の聖徒たちが国を受け継ぎ、その国を永遠に、世々限りなく立つ。(18 節)」という約束があるからです。

神の国とされた世界を受け継ぐ時に、キリストが裁き主になりますが、その働きに加わるということの意味です。黙示録の七つの教会の一つ、ティアティアラの教会に対してイエス様が約束を与えられていました。「2:26-27 勝利を得る者、最後までわたしのわざを守る者には、諸国の民を支配する権威を与える。27 彼は鉄の杖で彼らを牧する。土の器を砕くように。」

今、その栄光の姿に変えられる前の教会ではありますが、イエス様がタラントの喩えで語られたように、今、与えられていることに忠実であるならば、後に大きなことが任されます。ですから、教会の中で起こった小さな事件があるならば、それは後に世界を裁くことになる、事前の用意となります。教会というのは、いろいろな意味で、御霊によって、来るべき神の国に入る前準備をしています。礼拝による賛美も、献げ物も、すべてが天において、また地上の神の国において行うことです。ですから、小さな事件が出てきたら、それも、神の国に入るための前準備なのです。

<sup>3</sup> あなたがたは知らないのですか。私たちは御使いたちをさばくようになります。それなら、日常の事柄は言うまでもないではありませんか。<sup>4</sup> それなのに、日常の事柄で争いが起こると、教会の中で軽んじられている人たちを裁判官に選ぶのですか。

パウロは、私たちが世界だけでなく、御使いをもさばくと言っています。前の 4 章においても、使徒たちが見せ物になっている時に、それは「世界に対し、御使いたちにも」と言っていました(9 節)。私たちは、目に見えない世界をあまり日常で考えませんが、しかし、聖書には、目に見える世界が目に見えない主権や力、支配によって動かされていることを見ます。

ダニエル書 10 章には、ペルシアの国、ギリシアの国に、君、支配者がそれぞれいることが書か

れていまして、イスラエルにもミカエルという天使長が付いていることが書かれています。福音書では、イエス様は、例えば小さな子について、こう言われました。「マタ 18:10 あなたがたは、この小さい者たちの一人を軽んじたりしないように気をつけなさい。あなたがたに言いますが、天にいる、彼らの御使いたちは、天におられるわたしの父の御顔をいつも見ているからです。」そしてエペソ書に、目に見えないこれらの存在を、「すべての支配、権威、権力、主権」とパウロは呼んでいます(1:21)。

神は、ご自分の国を打ち立てられるにおいて、墮落した天使たち、つまりサタンや悪霊どもも裁かれることを聖書は教えています。「ユダ 6 またイエスは、自分の領分を守らずに自分のいるべき所を捨てた御使いたちを、大いなる日のさばきのために、永遠の鎖につないで暗闇の下に閉じ込められました。」そして、この裁きに、教会の者たちも加わることを教えています。「ロマ 16:20a 平和の神は、速やかに、あなたがたの足の下でサタンを踏み砕いてくださいます。」

ですから、このような目に見えない存在まで裁くこと、「日常の事柄」を対比させています。そしてコリントの人たちが、自分たちは知っているとして思い上がっていたことを思い出してください。パウロは、この手紙の後で、「8:2 自分は何かを知っていると思う人がいたら、その人は、知るべきほどのことをまだ知らないのです。」と言いますが、「知らないのですか」と畳みかけて問いかけ、彼らの無知を指摘しています。

## 2B 互いの訴え 5-8

<sup>5</sup>私は、あなたがたを恥じ入らせるために、こう言っているのです。あなたがたの中には、兄弟の間を仲裁することができる賢い人が、一人もないのですか。<sup>6</sup>それで兄弟が兄弟を告訴し、しかも、それを信者でない人たちの前でするのですか。

兄弟が兄弟を告訴していることそのものが、もう恥ずかしいことです。教会が、世に対して光でなければいけないのに、そうなっていない醜態を世にさらけ出しています。それでパウロは、「私は、あなたがたを恥じ入らせるために、こう言っているのです。」と言っています。

「兄弟」という言葉をパウロは使っていますが、そうです、ここは家族なのです。神の家族です。家族の中でのいざこざですが、それは、いろんな感情が入り混じっているものであります。外野はそっとしておくことによって、自然に癒えるのを待つのです。ここでも、もちろん刑事事件に発展することは訴えるべきですが、けれども、些細な小さな事件については、赦しが起こって来ることを願うものです。外部が関わると、むしろその傷が大きく広がります。それと同じように、家族のことは、家族の中で仲裁し、不正を正し、傷をいやしていく必要がありますね。

<sup>7</sup> そもそも、互いに訴え合うことが、すでにあなたがたの敗北です。どうして、むしろ不正な行いを

甘んじて受けないのですか。どうして、むしろ、だまし取られるままでいいのですか。

パウロは、続けざまに、いろいろ問題をしてきています。今、外の裁判所に問題を持っていくことを指摘していましたが、そもそも、問題を兄弟に指摘して、その兄弟が罪を認めて謝罪し、赦すという過程を踏むべきなのです。それができていないことが、そもそも敗北なのです。

「不正な行いを甘んじて受けないのですか。どうして、むしろ、だまし取られるままでいいのですか。」というのは、不正をそのままにしていなさいということではなく、赦しなさいということですね。誰かが人の金を盗んで、それを何かに使い果たしてしまったとします。それでも真摯に悔い改めているとします。そうすれば、訴訟に持って行って返済義務を負わせることもできますが、敢えてそれを行なわない、帳消しにして赦す選択もできます。

<sup>8</sup> それどころか、あなたがた自身が不正を行い、だまし取っています。しかも、そのようなことを兄弟たちに対してしています。

そうです、キリストに従っていると言っている者が、不正を働かれてもそれでもその人を赦すという基準で生きなければいけないのに、不正を働くことをやっちゃっているのです。しかも、兄弟たちに対してやっているのです。しばしば、教会において、一般の人にはしないことを、甘えによって、別に教会の人だから構わないとすることがあります。社会では非常識にされているのに、その非常識を教会には持ち込んでよいとする、倒錯があります。内輪に対する甘えですね。

### 3B 正しくない者たち 9-11

<sup>9a</sup> あなたがたは知らないのですか。正しくない者は神の国を相続できません。

パウロが、神の国のことを考えながら、6章の話を進めていることを心に留めてください。今、教会外の信じていない裁判官を正しくない者と呼び、また教会の中でも不正を働いている者について話しました。その前は近親相姦を犯している者についても5章で話していました。コリントの生活や文化の中にありふれているものがあって、それが教会の中にもあるのですが、それらを行なっていたら、神の国を受け継ぐことはないのだと明言しています。

<sup>9b</sup> 思い違いをしてはいけません。淫らな行いをする者、偶像を拝む者、姦淫をする者、男娼となる者、男色をする者、<sup>10</sup> 盗む者、貪欲な者、酒におぼれる者、そしる者、奪い取る者はみな、神の国を相続することができません。

これらの肉の行いは、日常生活にありふれているので、コリントの教会の人たちは、こうしたことを行い続けても自分たちは、神の国に入ることができると思い込んでいました。なので、「思い違

いをしてはいけません。」と言っています。私が信仰をもって間もなくして、教会の若い女性が自分のことを証していましたが、信仰を持つ前、性的関係を宣教師の息子と持っていたそうです。相手は、「私は信じているから、天国に行けるのさ。」と言い含めていたそうです。こういったことは思い違いなのだ、ということです。

ギリシア・ローマ文化の中にあつた教会に対しては、パウロは、一貫して同じことを手紙の中に書いていました。ガラテヤ書 5 章に肉の行いが列挙されています。同じように「神の国を相続できません」と言っています(21 節)。パウロがコリント人への手紙を書いているエペソにおいても、汚れや、貪りや偶像礼拝は、神の怒りが下ることを話しています(5 章)。コロサイ書も同じです。テサロニケの人たちには、第一の手紙で、彼らは愛と信仰にすぐれていましたが、それでも、情欲に溺れてはいけないことを戒めています。そこでも、「主は罰を与える」と警告しています(4:6)。それだけ、彼らの社会や文化の中では、これらの行いが深く浸透していて、定着していたことを表しています。私たちの文化や社会にも、ここに列挙されていることは当たり前になっているものが、結構ありますね。それであっても、私たちは全く異なる生活をするように召されているのです。以前、私は伝道する時によく使っていた言い回しですが、「日本では、「赤信号、みんなで渡れば怖くない。」と言われますが、真実は、「赤信号、みんなで渡ればみんな死ぬ。」なのです。」と言いました。

<sup>11</sup> あなたがたのうちのあつた人たちは、以前はそのような者でした。しかし、主イエス・キリストの御名と私たちの神の御霊によって、あなたがたは洗われ、聖なる者とされ、義と認められたのです。

ここに、主の御霊と御霊の力のすばらしさがあります。コリントの教会の人たちの中に、ここで列挙したような行いをしていた者たちがいたのです。けれども、主の御名と、御霊によって、第一に洗われました。これらの行いがいかに汚れているか、忌まわしいものかしれませんが、主は、それらを全くきれいにしてくださいました。そして第二に、聖なる者とされました。これは、洗われただけでなく、別たれて、神のものとされたということです。そして第三に、義と認められます。これまで、罪を犯したことがなかったようにみなされるのです。この福音の中に生きているのです。この劇的な変化を福音はもたらし、その全く新たな生活の中に私たちは生きています。

## **2A 主のためにある体 12-20**

淫らな行いについて、パウロは続けて語っていきます。

### **1B 欲を満たす自由 12-14**

<sup>12</sup>「すべてのことが私には許されている」と言いますが、すべてが益になるわけではありません。「すべてのことが私には許されている」と言いますが、私はどんなことにも支配されはしません。

この、「すべてのことが許されている」というのは、パウロ自身が、キリスト者は自由を得るために

召されたことを話す時に、似たようなことを話していたかもしれません。あるいは、コリントの中で、よく使われていた言い回しだったのかもしれませんが。自由な雰囲気であちこちで満ちていたコリントには、これはとても魅力的なものだったでしょう。パウロがたとえ、この言い回しに似たことを言ったとしても、意図していることとは正反対にコリントの人たちは使っていました。つまり、性的な逸脱をしても、何をしても私たちには許されている、として使ったのです。

けれども、午前中に話しましたように、キリスト者の得た自由というのは、神の御心を行なうことのできる自由であり、善を行なう自由であり、自分が義を立てるために動くのではなく、キリストの愛によって、自分を度外視して隣人のことを思い、愛し、仕える自由です。単に、これは良いことが間違っているかという、規則に従うのとは次元の違う、高尚な生き方を示しています。

<sup>13</sup>「食物は腹のためにあり、腹は食物のためにある」と言いますが、神は、そのどちらも滅ぼされません。からだは淫らな行いのためではなく、主のためにあり、主はからだのためにおられるのです。

<sup>14</sup> 神は主をよみがえらせたが、その御力によって私たちも、よみがえらせてくださいます。

こちらの言い回しは、完全にコリントの社会でしばしば言われていたことです。そして教会の人々も引用していました。ギリシア文化では、精神的なことと、肉体に関することは別に考えていました。霊肉二元論でした。体については、神は関心がないという考えです。だから、肉体に関することは、そのまま欲望に任せなさいというものです。肉体が性の欲情を抱くなら、そのまま発散させるのがよいという考えです。今の時代にもこの考えはあるでしょう。男は、「上で考えるのと下で考えるのは違う」として、有名人の中に性的に逸脱した人は数知れず、です。そして性教育において、性欲を抑圧するのはよくない、それを発散させなければいけないとします。

しかし、それはあまりにも刹那的です。一時的なものです。「神は、そのどちらも滅ぼされます。」とあります。神は、食物を口に入ったら消化させます。そして腹また体は、いつか死んで滅ぶようにされます。しかし、神は、そういった一時的なもののために、体を造られたのではありません。食欲や性欲をただ満たすためだけのために造られたのではありません。神が体を造られたのですから、その体をもって神の栄光を表すのです。主のために、私たちのこの肉体があります。

そしてその逆も真なりで、主は、私たちのからだのためにも生きておられます。つまり、この体が滅んでも、神が主を、体をもってよみがえらせたように、私たちも、その御力で肉体をよみがえらせてくださるのです。ギリシア人は、自分の体は死んだら終わり。だから、生きていううちにやりたいことをやろう、と考えていたのですが、真理は、自分の体はよみがえる。だから、この肉体で行っていることは、後の世において報いとして与えられる、ということなのです。「Ⅱコリ 5:10 私たちはみな、善であれ悪であれ、それぞれ肉体においてした行いに応じて報いを受けるために、キリストのさばきの座の前に現れなければならないのです。」

## 2B 遊女との交わり 15-17

私たちは、この肉体で行うことについて、それが主のためにあり、主がこの体をよみがえらせてくださるのだということで、単に性欲に身をゆだねてはいけないことが分かります。次、15節からは、肉と霊は密接につながっているのだということ、「一体」という言葉から見ていきます。

<sup>15</sup>あなたがたは知らないのですか。あなたがたのからだはキリストのからだの一部なのです。それなのに、キリストのからだの一部を取って、遊女のからだの一部とするのですか。そんなことがあってはなりません。<sup>16</sup>それとも、あなたがたは知らないのですか。遊女と交わる者は、彼女と一つのからだになります。「ふたりは一体となる」と言われているからです。<sup>17</sup>しかし、主と交わる者は、主と一つの霊になるのです。

聖書は、人を霊的な存在として造られました。土のちりからこの体を造られ、そしてご自分の息で、霊を吹き込まれました。そして、その人のわきから、女を造られました。そして、結婚の奥義が創世記 2 章 24 節に書いてあります。「それゆえ、男は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となるのである。」男と女の関わりに神が介在しておられ、男が女と結ばれて一つになる時にも、神が介在しておられます。つまり、結婚して性の関係を持つ時に、神がそれを祝福しておられるのであり、その肉体における営みは霊に直接、関わっているのです。私たちに与えられた性欲は、結婚において霊的に豊かに祝福されます。

キリスト者として、しばしば、二つ誤解されている領域がありますが、一つは仕事、もう一つは性の営みです。仕事は、汗水を流して労するというで否定的に捉えますし、性の営みは汚らわしいと捉えます。けれども、どちらもアダムが罪を犯す前にすでにあったものなのです。アダムは、土を耕し、動物に名前を付ける労働をしていました。そしてエバと性的に交わっていました。私たちが否定的に捉えがちなのは、罪を犯した後で、罪の影響のある労働や性の交わりを思っているからであって、本来どちらも祝福されるものなのです。

そして、この結婚の営みは、実はキリストと教会の関係を示している奥義なのだと、パウロはエペソ 5 章で話しています。「5:31-32 「それゆえ、男は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となるのである。」<sup>32</sup> この奥義は偉大です。私は、キリストと教会を指して言っているのです。」夫が妻を愛するのは、キリストが教会を愛されて、ご自身を献げられたこと。妻が夫に従うのは、教会がキリストを主として従うことを示しています。教会はキリストの花嫁として今、みことばによって整えられて、再び戻って来られる花婿キリストに引き取られて、天において婚姻を行なうのです。

そういった結婚、男女の結びつきという背景があって、キリストに結ばれた者になるというのが、パウロがここで言っている、「あなたがたのからだはキリストのからだの一部なのです。」ということです。私たちは、御霊によってキリストのからだの一部にされました。そうやって、キリストに結ば



れた者になりました。ですから、この肉体もキリストのものであり、これを他の女と一つになるのに使うのであれば、一体どういうことなのか？キリストと遊女を一つにしてしまう、ということなのです！それでパウロは、「そんなことがあってはなりません。」と言います。考えてみてください、自分が夫婦で一つの寝床に寝ています。その二人の間に、他の愛人が入って来て寝てくることを。おぞましいことですが、あなたが遊女と寝ることで、まさにそういうことをしているのです。

「しかし、主と交わる者は、主と一つの霊になるのです。」と言っています。霊において、私たちは主と交わっています。けれども、肉体で行っていることは霊にも影響を与えます。ここが、今の社会でないがしろにしていることです。婚前交渉がいけないのは、肉体の結びつきと、靈魂の結びつきは直接、連動しているからです。結婚という神の前で行うこと、すなわち霊的なことです。また、人々が証人として立ち、社会的に二人が結ばれたこと。そして結婚式を終えて二人が初めての夜を迎えます。これは肉体におけるものです。これがほぼ同時に行われることにより、霊肉が連動して、最高の満たしと幸福を得られるのです。神が人間の体と精神、霊をそのように造られたのです。もし必要なら、雅歌の学びをロゴス・ミニストリーで見てください。二人が結ばれる前まで、二人が待ち焦がれていて、その待っていること自体が結びつきを最高にさせることを、良く教えています。

コリントの社会では、売春は当たり前でした。この手紙の学びの始まりでお話ししましたように、コリントの町のアクロポリス、山になっている要塞には、アフロディテの神殿があり、その女祭司は売春婦でした。町に降りて行って、売春で金稼ぎをするのです。教会の人たちにも、遊びに出ていく者たちがいたのです。日本の風土にも、不倫をされるよりはましとして、風俗の通う夫を我慢する妻たちもいますね。けれども、キリスト者として、これはあってはならないことなのです。

### 3B 自分の体に対する罪 18-20

<sup>18</sup> 淫らな行いを避けなさい。人が犯す罪はすべて、からだの外のものです。しかし、淫らなことを行う者は、自分のからだに対して罪を犯すのです。

私たちは、罪を犯すことについて、もし他の人に迷惑をかけなければいいではないか？と思ってしまいます。けれども、パウロは、淫らな行いについては、「自分のからだに対して罪を犯す」と言っています。このことが、どれほどの罪深いものなのか、実感がわきません。自分自身の中の問題であっても、自分のからだなのだから、迷惑をかけていないと思ってしまうからです。しかしパウロは、大いに悲しませている方がおられることを指摘しています。聖霊です。聖霊なる神を悲しませています。

<sup>19</sup> あなたがたは知らないのですか。あなたがたのからだは、あなたがたのうちにおられる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたはもはや自分自身のものではありません。

ここです、私たちのからだについて、私たちが「自分のものなのだから、何をしてもかまわない」とすることがいかに間違っているかを示しています。神から受けた聖霊が住まわれる宮なのです。パウロの時代にも、エルサレムに建っている神殿がありました。けれども、主がこの終わりの日に聖霊を降り注いでくださり、教会を生み出してくださったのです。私たちがからだ、聖霊の宿られる宮となったのです。

だから、自分の思い通りにすればよいと言えないのです。もはや、自分の体は自分のものではないのです。神の聖霊の住まわれるところなのです。例えば、中絶の問題を挙げられます。アメリカでは政治問題となっていますが、生命尊重と女性の選択とで意見が真っ二つに分かれています。女性の選択だと強調するのは、子宮もその中の胎児も自分の体にあるのだから、自分で選択できるとします。しかし生命尊重派は、そこにある生命は、すでに他の人格を持つ、尊厳のある存在である。母が子を殺したら殺人のように、子宮の中においてもその子を殺すことはできない、とします。体内にいても、それは自分自身のものではないという認識ですね。それと似ているかもしれせん。私たちの体は、神の聖霊が宿る宮なのです。自分自身のものではありません。

<sup>20</sup> あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから、自分のからだをもって神の栄光を現しなさい。

これも大事です。私たち自身が、「代価を払って買い取られた」ということ。キリストが流された血がその対価となり、神が私たちを買い取られました。それを「贖い」と呼びます。ですから、私たちは既に私たちのものではなく、神の所有となっています。このことをコリントの人たち、特に遊女を買っている者たちには、強烈な言葉だったと思います。なぜなら、その遊女の中にはかなりの割合で、奴隷身分の女性がいたであろうことです。親が誰であるか分からない女性や奴隷身分の女性が、多く遊女にいたのです。しかし、今、自分自身が罪に渡された奴隷であり、今は、キリストの血によって神に買い取られた奴隷なのです。

それで、「自分のからだをもって神の栄光を現しなさい。」ということです。この、私たちに与えられた身体に、神の大きなみこころがあるのです。この体に対して自分がしていることで、神を喜ばせているか、悲しませているかが分かるのです。「心が神に向いていれば、体は関係ない。」と言っている人は、心も神に向いていません。私がしばしば喩えて話しますが、もし私が他の女の人の家に行ってそこに宿泊して、それで「私は妻を愛している」と言ったら、誰が信じますか？私の心は欺きに満ちており、姦淫の心で汚れに満ちているのです。

それは、身体をどこに動かしているかがとても大事なのです。だから、身体を持って来て礼拝することも、自分の財産を持ってくることも、身体をもって対面で交わることもみな大事なのです。イエス様は肉体をもってこの世に現れました。だから私たちもこの体で神に栄光を現します。